



明治から敗戦までの激動の時代を、実業家、教育者、政界人として幅広い分野で道を開いた一人が、甲南学園（神戸市東灘区）の創立者として知られる平生釵三郎だ。苦学生として勉学に励んだ後、朝鮮税関の官吏、神戸商業学校の校長を経て東京海上保険に迎えられた平生は、その後、七年制甲南高等学校の創立・運営、甲南病院の設立、川崎造船所の再建、ブラジル移民事業への尽力、文部大臣として国字改革や義務教育年限延長を推進するなど、グローバルなその活躍ぶりとはとまるところを知らなかった。常に時代からその手腕を求められた平生の根底にあったのは、何人にも代え難い個人の能力を尊重してそれを社会のために生かしてほしいとの信念だった。私欲を捨てたその生き様は、「社会国家への強い奉仕の精神」に貫かれていた。

（神戸新聞東京支社編集部長 東方利之）

実業界、教育界、政界から

ひらお はち さぶろう

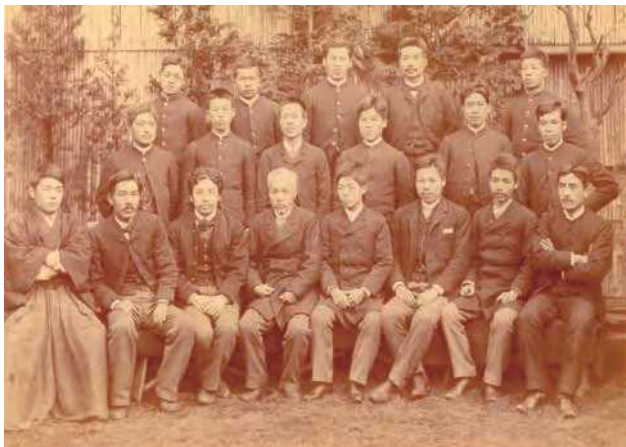
時代をけん引した平生釵三郎

苦難の時こそ貫かれた奉仕の精神

武門に生まれ、苦学の末、社会へ

平生は明治維新を直後に控えた1866（慶応2）年、美濃国加納（現・岐阜市）で永井肥前守の家臣田中時言の三男として生まれた。父は庄屋の出だが、武士にあこがれ、念願かなって家臣中でも旧家に属する武門田中家に入った。太平の世が長く続き、武士道が遠い過去のものとならず、子どもたちを厳しく律し、その精神は後々まで平生の中に生き続けたのであった。

小学校から成績優秀だったがため、父が中学校に通わせるも、貧窮



東京商業学校に編入学（前列右から3人目）



東京海上保険の大阪・神戸支店長時代

のため退学し上京した。平生は給費生として難関の東京外国語学校に入学したが、卒業間際に廃校となり、東京商業学校に編入学した。その際、学費を得るために旧岸和田藩士の家老職も務めた平生忠辰の養子となる。東京商業学校は高等商業学校（後、東京高等商業学校、現・一橋大学）となり、平生は、首席になるほどの優秀な成績で卒業する。海外で働く希望を持っていた平生ではあったが、1890（明治23）年、同校付属主計学校の助教諭となつて経済学と英語を教えた。平生25歳。教育者としての第一歩だった。

翌1891（明治24）年、恩師の

矢野二郎校長からうれしい話が舞い込む。朝鮮政府の仁川にある税関で働かないかとの勧めである。平生は直ちに快諾し、ここで英語力と貿易商たちを相手に交渉力を磨いた。だが、わずか2年後、再び矢野校長から連絡を受け、兵庫県立神戸商業学

校の校長に就いた。当時同校は風紀が乱れ、廃校の危機にあったが、設備や優秀な教員雇用のために予算を獲得し、生徒たちとも規律を重んじながらも距離を縮めて付き合った結果、わずか1年で学校を再建することに成功した。

東京海上保険で実業家の第一歩を踏み出す

再び転機が訪れたのは1894（明治27）年、29歳のときだった。

真つすぐに難関に立ち向かう手腕に東京海上保険が目をつけ、筆頭書記として平生を迎え入れた。業界の先駆者としての東京海上保険だったが、ライバル会社の急増とそれまでドル箱だったロンドン支店の不振で経営は不安定だった。のちに同社長となる各務謙吉と共に、平生は何よりも信用を重んじ、持ち前の行動力と交渉力で合理的な決断を次々と下し、赤字体質のロンドン支店を廃止した。さらに大阪・神戸両支店を開設し、成功を収めることになる。膨大な損害を被る恐れのある日露戦争時も、他社が契約を制限する中、安全な航路を予測して保険を引き受け、望外な利益を得た。会社は優良企業へと飛躍し、平生は1917（大正6）年、52歳で専務取締役にな

就任した。入社して20余年、経済人としてまさしく絶頂期にあった壮年期を駆け抜けた。

欧米の教育施設を視察し、英国の教育制度に感銘するのも、ロンドン支店監督として渡英していた経験からくるものでもあったであろう。平生はパブリックスクールに出会い、学生が勉強やラグビーなど野外スポーツに励む姿に感銘を受けた。この経験が、平生が思い描く「自由に個性を尊重する」紳士淑女を育てる教育を改めて認識することになったと思われる。

理想の教育を掲げ、人物を育成

ロンドンから帰国後、大阪の社宅から武庫郡住吉村（現・神戸市東灘区）に転居した平生に、住吉村やその周辺に住む実業家から学校設立に協力してほしいとの話が持ち込まれた。1911（明治44）年、最初に甲南幼稚園が創立された。1919（大正8）年には甲南中学校ができ、続けて甲南高等女学校、さらに高等学校令の改正に伴い、中学校を尋常科とし、高等科とともに七年制甲南高等学校が創立された。途中、寄付が十分集まらず、株価の大暴落もあった



創立当時の甲南尋常小学校



七年制甲南高等学校



住吉の平生邸で開かれた拾芳大会



神戸市東灘区の山手にある甲南病院

が、教育こそが日本をつくるとの信念で周囲を説き、私財も投じて幼稚園から高校まで、子どもたちに学ぶ場を用意した。

実業家として日本の近代化に貢献を続けながら、40代後半から50代は理想の教育実現へと情熱を傾けた。貧しかった自らの経験から、尋常小学校を創立した頃から住吉の自宅に若者を住ませ、学校に通わせた。私費による育英事業は、後に「拾芳会」という組織となり、学生に高等教育の機会を与えた。

病院建設で社会奉仕の道へ

実業界で名をはせ、教育者として歩む平生が、次に向かったのは社会奉仕だった。1925(大正14)年、

60歳で東京海上火災保険の専務取締役を辞め、かねてから構想を温めていた病院の設立へと動く。きっかけは二人の妻を病で亡くしたことだった。さらに、拾芳会の学生が病院で法外な治療費を請求されたこともあり、「恵まれない人でも治療が受けられる病院」を掲げた。寄付を募るため、財閥の当主や実業家、地元の高裕層を粘り強く回った。それは数年間にもおよび、敷地は村有地を借り受け、拾芳会の奨学生たちが医者として手を挙げてくれた。

足かけ10年の歳月を経て、1934(昭和9)年、住吉の山手に甲南病院が開院した。今も待合室に残る平生の言葉がある。「人間愛の精神に基づき、あらゆる点において病人を本位とした病める病人のための病院たらん」。困窮者には一部免除する一

方で、恵まれた患者には規定の治療費の他に寄付を求め、「共働互助」の精神をより所とした。開院から4年後に発生した阪神大水害では、ガリ版刷りの無料診察券を発行し、負傷者の救済に当たった。完全看護制、完全給食制は当時としては画期的で、病人の早期回復や家族の負担軽減につながった。

川崎造船所を立て直し、神戸市民を救う

念願の病院開設が現実味を帯び、社会奉仕に専念しようとする平生だったが、世界的な不況にあえぐ実業界が放っておかなかった。1931(昭和6)年、日本の三大造船所に数えられた川崎造船所が倒産の危機に

ひんし、平生は強制和議整理委員に推された。学園の育成と病院建設に精力を傾けていたため、当初、強く断ったが、下請けや家族も含めると神戸の人口約91万人の1割弱の生活がかかっている状況を目の前にして立ち上がったのだ。債権者や株主にとって厳しい条件の調停をまとめあげ、続けて社長として再建に当たった。人事の刷新や組織改革、生産性向上、遊休施設の売却、福祉の充実などを断行し、3年近くにわたって会社再建のために尽力した。

1935(昭和10)年、70歳になった平生に政府から新たな依頼が寄せられた。当時、戦後不況と人口の過剩対策として移民政策が進められてきたが、ブラジルが自国の働く場を奪われているとして、過去50年間の移民の2%に制限されてしまった。外務省は民間の経済外交で事態を打開しようとして、使節団の団長に平生を選んだ。川崎造船所の再建で地域に奉仕した平生は、次に国民に奉仕する活動へと移る。当時、ほとんど貿易取引がなかったブラジルとの関係を見直し、綿花を輸入することで双方の利益につなげようと交渉した。使節団としての滞在は1ヶ月間に及び、途中、チフスでブエノスアイレスの病院に入院しながらも、真摯にして真剣な態度にブラジル政府から信用を得、その後移民問題の解決も



勲一等旭日大綬章を受章



甲南大学構内にある「常二備へヨ」の石碑
阪神大水害を受けて平生鈆三郎が訓示した言葉

文部大臣から 産業界のまとめ役へ 戦時下の日本を支える

さることながら、両国間の貿易額は
一気に増大した。

翌年の2・26事件後になった内閣
総理大臣広田弘毅は、平生の川崎造
船所の再建やブラジルでの功績、教
育者としての実績を高く評価し、貴
族院議員に勅任されたばかりの平生

を文部大臣に迎えた。平生は持論
だった義務教育の2年延長案を推し
進め、予算獲得までこぎ着けたが、
政権の崩壊後廃案となった。

国家からも必要とされるように
なった平生を次に待っていたのは、
国策会社である日本製鉄の会長・社
長のポストだった。時は1937(昭
和12)年。直後に日中戦争が勃発
し、さらに太平洋戦争へと向かって
いく。終戦までの間、平生は日本の
労働者を組織化し、戦争への協力態
勢を敷く大日本産業報国会の会長の
ほか、鉄鋼業界を取りまとめる鉄鋼
統制会会長を歴任し、戦時下の日本
を支えた。その間、平生は勲一等旭
日大綬章を受章し、枢密顧問官に親
任される。しかし彼の努力も空しく
日本は1945(昭和20)年8月15
日に敗戦を迎え、それを見届けるよ



平生鈆三郎直筆の扁額「正志く 強く 明らかに」

うに同年11月、80年の生涯を閉じた。
日本の転落を目の当たりにしなが
ら晩年を国家に捧げた平生が、戦時
中も旧制甲南高等学校の校長として
生徒に訓示していた言葉がある。「人
格の修養と健康の増進に加えるに天
賦の特性を伸長せよ」。経済人とし
て教育者として、または政界の一人
として立場は変わっても、常に共存
共栄を求め人としての有様を思い、
公のために尽くす道を貫いたその精

神は、復興へと立ち向かう戦後の日
本を見据えていたに違いない。(年
齢は数え)

【参考文献】

「平生鈆三郎日記第1巻―第18巻」
(平生鈆三郎日記編集委員会 甲南学園
「平生鈆三郎自伝」
(平生鈆三郎著・安西敏三校訂 名古屋大学
出版会)

「写真」 学校法人甲南学園所蔵資料

| | |
|-------------|----------------------------------|
| 1866(慶応2)年 | 美濃国加納で永井肥前守の家臣・田中時言の三男として誕生 |
| 1881(明治14)年 | 東京外国語学校に入学 |
| 1890(明治23)年 | 高等商業学校(現・一橋大学)を卒業 同校付属主計学校助教諭に就任 |
| 1891(明治24)年 | 朝鮮(韓国)仁川海関幫弁に就任 |
| 1893(明治26)年 | 兵庫県立神戸商業学校校長に就任 |
| 1894(明治27)年 | 東京海上保険に入社 |
| 1900(明治33)年 | 東京海上保険大阪・神戸の両支店長 |
| 1911(明治44)年 | 甲南幼稚園を創立 |
| 1912(明治45)年 | 甲南尋常小学校を創立 |
| 1917(大正6)年 | 東京海上火災保険の専務取締役 |
| 1919(大正8)年 | 甲南中学校を創立 |
| 1921(大正10)年 | 灘購買組合(現・コープこうべ)創立に協力・理事 |
| 1923(大正12)年 | 七年制甲南高等学校を創立 |
| 1931(昭和6)年 | 甲南病院を創設、理事長に就任 |
| 1933(昭和8)年 | 川崎造船所社長、甲南高等学校長 |
| 1935(昭和10)年 | 訪伯経済使節団長 貴族院議員 |
| 1936(昭和11)年 | 広田弘毅内閣の文部大臣 |
| 1937(昭和12)年 | 日本製鉄取締役会長 |
| 1941(昭和16)年 | 鉄鋼統制会会長 |
| 1942(昭和17)年 | 勲一等旭日大綬章を受章 |
| 1943(昭和18)年 | 枢密顧問官 |
| 1945(昭和20)年 | 東京都目黒区にて永眠 |